

# カントウータ

Cantuta 13

社団法人日本ボリビア協会

Homepage: <http://www.nipponbolivia.org/>

2008/12/12 発行

## 協会からのお知らせ

### 1. 総会議事録の送付について

去る8月20日に開催されました定時総会の議事録を巻末に添付致しましたのでご覧ください。

### 2. ゆうちょ銀行の取り扱いと呼称の統一

当協会の呼称は『ASOCIACION NIPPON BOLIVIA』と日本を『ニッポン』と称していますが、預金通帳の振り仮名では昔のままの『ニホン』になっているものがありました。

このたび、「ゆうちょ銀行」が、平成21年1月5日より全国銀行データシステムに接続することにより、全国の金融機関(一部を除く)と相互に振込みができるようになるのを契機として当協会の呼称を『ニッポン』に統一しました。

### 3. 当協会への振込みについて

当協会へ振込みを頂く場合、銀行振込の場合は振込人氏名がカタカナで氏名が記されているのみで、当方からの受領に関する連絡等に支障を来しております。電話番号・住所を知るには守秘義務の問題から、改めてご本人の意向を確認した上で、教えてもらう等厄介な手続きが必要になります。

つきましては、振込みの優先順位を次のようにさせていただきます。

#### 第1 優先振込み

##### 郵便局から郵便振替振込み

当協会が発行する『払込取扱票』を利用するか、郵便局備え付けの「振替払込用紙」にて、『00160=9=542171 社団法人日本ボリビア協会』宛てでお願いします。

#### 第2 優先振込み

##### 銀行等からの『ゆうちょ銀行』への振込み

次の宛先でお振込み下さい。

銀行名: ゆうちょ銀行

金融機関コード: 9900

店番: 019

店名: 〇一九店 (ゼロイチキョウ店)

預金種目: 当座

口座番号: 0542171

カナ氏名: シャダンハウジンニッポンボリビア  
キョウカイ

上記、よろしくお願ひいたします。

## ボリビアの話題

### 《ウユニ塩湖に飛行場建設》

法令第29637号により、ウユニ塩湖に飛行場が建設される予算は1080万ドルで、政府並びにポトシ県庁から捻出される。

工期は15ヶ月7月11日、モラレス大統領は竣工式に参列し、500万ドルを手交した。ウユニの塩湖には国内外からの旅行者が毎年6万人以上訪れる有名な観光名所となってきた。塩湖内、その周辺を案内する車も、観光者の増加に伴い、毎日100台以上の車が走っているが、塩湖には交通標識がなく、交通事故も起きている。

(EL DEBER 7月12日)

### 《ブラジル・ラパス間の縦断道路》

バンド・ベニ県を通過して、ブラジルとラパス間の縦断道路の建設が、いよいよ40年来の夢が実現することになった。7月18日、ブラジルのルラ大統領、ベネズエラのチャベス大統領、当国のモラレス大統領はリベラルタ市にて、道路建設にかかわる融資(ブラジルからの2億3千万ドル、ベネズエラからの3億ドル)の調印式を行った。第一段階としてグアヤラメリンからルレナバケまでの貫通道路508kmの工事から始まり、その後、グアヤラメリンからラパスまでの道路建設に入る予定だ。

(EL DEBER 7月18日)

## 大使随想

### 転換期のボリビアと 日本人移住者・日系人

権力中枢へ台頭する先住民・農民勢力  
良好な日本との関係、存在感示す日系社会

前在ボリビア大使 白川光徳

### はじめに ボリビアという国

2004年2月から本年2月まで4年間ボリビアに在勤しました。ボリビアは南米大陸の中央部に位置する内陸国で、その首都ラパス市は、時間距離でいうと、現在、東京から世界で最も遠い首都です(ただ

し、ルートの取り方によって、パラグアイのアスンシオンが少し遠くなる場合があります。ラパス市は、海拔 3000~4000 メートルの傾斜地にあり、中心部が約 3700 メートル、富士山頂とほぼ同高度で、第二位のエクアドルのキト市に千メートルの圧倒的差をつけての世界で一番高い首都です。面積は日本の約 3 倍 (110 万?) で人口は 9 百万人余。国土気候は変化に富み、アンデス山脈の一部を成す寒冷な西部・南部の山岳高原地方、東部・北部の (亜) 熱帯気候の低地平原地方及びその中間の温暖な渓谷地方の三つに大別され、その間を山脈、峡谷、川が複雑に走っています。国民の人種構成も複雑で、ボリビアは、国民人口の中の先住民族の占める割合が中南米の中でも最も高く (55%、ペルー、グアテマラがこれに続く) しかも、先住民族と言っても一つではなく、主要なアイマラ族、ケチュア族などのほか少数民族を含めると 36 民族があり、それぞれが異なる独自の言語、文化、社会習慣を持っているといわれています。このようにボリビアは多様性の豊かな国であり、逆にこれが一つの国としてまとまりにくくしている面もあります。

天然資源、特に銀、錫、鉛、亜鉛等の鉱物資源に恵まれており、かつてスペイン植民地時代にはボリビアの銀がスペイン王室の主要財源を成し、20 世紀の中頃には世界第二の生産国として、その錫は世界の市場価格を左右していたと言われます。最近では南米第二の埋蔵量を持つ天然ガスが注目されており、南米最貧国ボリビアの、新たな発展の貴重な梃子となる可能性を持っています。また未開発ながらリチウムは埋蔵量が世界最大で巨大なポテンシャルを秘めています。

## 政治に深く関与するようになった先住民族

私は 20 年ほど前にボリビアに出張したことがあり、その後も中南米地域全体への関心の中でボリビアについても一定のイメージを持っていました。赴任して、それまで抱いていたイメージと大きな違いは感じませんでした。一つ新鮮に感じ、かつ見方を改めさせられたのは、先住民族といわれる人達です。ボリビアは先住民系の多い国であるが、それらの人々は温厚であり、農業、牧畜等で平和に暮らしているといった牧歌的イメージを持っていましたが、実際目にしたのは、生々しい権力闘争の主要当事者の一つとして日常の政治に深く関与している姿でした。

日本ではボリビアのことが余り話題になりません。この度、海外日系人協会から折角寄稿の機会を与えられたので、ボリビアにおける日系人社会のことと併せて最近のボリビア政情について紹介させて頂きたいと思えます。

## 歴史的転換期にあるボリビア=かつて見なかった先住民・農民層の激しいデモ

ボリビアは今一つの歴史的転換期にあるといわれています。ボリビアは独立以来今年で 183 年になりますが、かつては、独立年数より政権の数の方が多いと言われるほどクーデター等の頻繁な国でした。しかし 1982 年の民政復帰以降は、各政権はほぼ順調に任期を全うし選挙による政権交代のルールが根付いてきたかのようでした。ところが、私の着任 4 カ月前の 2003 年 10 月、当時のサンチェス・デ・ロサーダ大統領は、天然ガスの輸出政策をめぐる、先住民、農民その他の社会セクター層から、約 60 名の死者を出す激しい抗議デモに遭い、任期を三年余残して辞任せざるを得なくなりました。私が赴任した時は、副大統領から昇格したカルロス・メサ大統領の率いる新政権が発足したばかりで、状況は一応落ち着いていましたが、自らの政党的基盤を持たず、また政策的準備も十分でない新政権にとり、前途は誠に多難に満ちたもので、行き詰るのは時間の問題との見方が支配的でした。

## ボリビアの近年の歴史

### ネオ・リベラル的な『ボリビア・モデル』の成立と行き詰まり

ここでボリビアの近年の歴史について、極めて大雑把に振り返りますと、まず 1952 年に、市民の武装蜂起による革命政権が成立し、ボリビア革命と呼ばれる大きな社会改革が行われました。鉱山会社の国有化、鉱山公社の設立、普通選挙制・無償教育制の導入、農地改革等が国家主導により行われました。この政権は十数年後、軍事クーデターにより崩壊し、その後、20 年近くの間、軍事政権の時代が続きます。1982 年に民政復帰が行われますが、未曾有のハイパーインフレに見舞われ、85 年に登場した政権は、鉱山公社の合理化・民営化、価格・貿易の自由化、補助金の削減など経済の安定化と自由化政策を断行し、危機的状況を克服し、その後の安定的経済発展の基礎を築きます。このとき取られた一連の経済政策は、その後多くの国で採用されたいわゆるネオ・リベラル政策の先駆的なもので、これを支えた政治的協調体制を含め、「ボリビア・モデル」と呼ぶ人もいます。この時の大統領パス・エステンソロは、実は 1952 年のボリビア革命の主導者でもあり、革命政権下で進めた国家主導型モデルを自らの手で民営化・自由市場経済化へと 180 度、舵を切り換えたわけですが。このパス大統領の企画大臣として、新自由政策の立案・遂行に中心的役割を果たしたのが、後に 2 回大統領となるサンチェス・デ・ロサーダでした。この経済の安定と自由市場志向の政策は、その後の政権にも引き継がれていきました。しかし、順調に進展してきた経済は、90 年代末より勢いを失い、経済成長の鈍化、潜在失業、インフォーマルセクターの蔓延等不調をきたし始めます。同時に、農民・労働者・公務員その他様々な分野で不満や要求の声が高まっ

ていき、ストライキ、デモ行進、道路封鎖等が頻発するようになりました。

## 疎外されてきた多数派

### 先住民・農民層の政治的発言力の増大

他方、国民の多数派を占める先住民・農民階層は、長年にわたり、社会の下層を構成し、政治、経済の権力の中核から疎外された立場に置かれていましたが、国の近代化の過程で徐々にその社会的認知度も高まり、1980年代後半頃からは様々な組織化等が進められました。1993年に発足したサンチェス・デ・ロサーダ第一次政権の下で施行された大衆参加法（1994年）地方分権法（1995年）は、先住民・農民階層の政治参加の動きを大きく促進しました。新しく台頭してきた先住民・農民勢力は、ネオ・リベラリズムやグローバリゼーションに批判的で、土地その他の天然資源に対する権利、社会的公正、伝統的固有の文化・価値観の尊重等を主張するとともに既存の諸政党を腐敗勢力と糾弾し、革新勢力として政治的発言力を増大させていきました。

### 必要となってきた“新国家モデル”への転換

このように1985年から推進されてきた国家モデルは、経済不況と新しい社会勢力としての先住民・農民グループの台頭を背景に、有効性を失っていき、ボリビアにはそれに代わる新たなモデルが必要とされ、今その転換期にあるというわけです。

2003年10月、サンチェス大統領の後を継いだメサ大統領は、デモ、ストライキ、道路封鎖等が日常茶飯的に頻発するようになっていく中で、労組、職業組合等から賃上げその他次々と出される様々な要求に対し、まるでめくら叩きのような対応を強いられながら、その都度、対話と説得を通じ何度か危機的状况を乗り越えていきます。最大かつ緊急課題の一つである天然ガス政策について、2004年7月には、国民投票を実施し、この結果を踏まえ、新たな炭化水素法の検討を進めていきます。もう一つの重要課題で、先住民・農民グループから強い圧力がかけられていた国のあり方を根本的に見直すための憲法改正議会（以下、改憲議会）の設置問題についても、その準備が政治日程に入りつつありました。しかし、2005年に入り、サンタクルス県を中心とする「半月地方」と呼ばれる東部低地地方から地方自治拡大の要求が突きつけられました。この新たな対立要素が表出することで、情勢は混迷の度合いを深めていきます。半月地方は、大規模な農牧業を基礎とするボリビアの経済の中心地で、石油・天然ガスの生産地方でもあり、先住民・農民の求める農地改革や資源開発への制約等とは本質的に利害が対立する面を持っています。同年5月、各地でデモや道路封

鎖等の圧力行動が展開される中で、先住民・農民等の社会勢力を代表するMAS（社会運動党）の意向を強く反映して当初案に比しナショナリスティックな性格を強くした新しい炭化水素法案が議会で可決、成立しました。しかし、その後も同法の運用、地方自治問題、憲法改正議会の設置等をめぐり、国内の混乱は続き、6月、メサ大統領は辞任します。後任には憲法の規定で優先順位3位のロドリゲス・ベルツェ最高裁判所長官が就任し、過渡的管理政権に徹したロドリゲス政権の下で、大統領及び国会議員選出のための総選挙を同年12月に実施することが決められ、同選挙で、エボ・モラレス率いるMASが大勝し、2006年1月、モラレス政権の発足へと繋がっていきました。なお、この総選挙と同時に、従来、大統領による指名制であった県知事を、県民の直接選挙で選出することとしたメサ政権時代における決定に従い、初の知事選挙が実施されましたが、MAS系が勝ったのは全国9県のうち西部高地地方の3県に止まりました。

## 絶対過半数の支持で出現した先住民大統領

### 大統領選挙とモラレス MAS 政権の発足

モラレス政権は、民政復帰後のボリビア現代政治史上初の絶対過半数（約54%）という事前の予想を大きく上回る支持票を得、他の候補に大差をつけて選挙戦を制し発足しました。中間階級の多くが、政治の変化または長期にわたる国内混乱の収束を期待してMASに投票したと見られます。モラレス政権で注目されるのは、何よりも、大統領自身が先住民出身であること、そして長年、社会の疎外者の立場に置かれていた先住民・農民層が初めて権力の座に就くという画期的性格を持つ政権であることです。また、モラレス大統領がコカ葉栽培農民組織のリーダーであり、近年、左傾化傾向にあるといわれる中南米で、反米の旗頭的存在のベネズエラのチャベス大統領、キューバのカストロ議長と親密な関係にあることから、特に伝統的にボリビアに大きな影響力を保持してきた米国、更に中南米その他地域との関係の展開も注目された点です。

### MAS 政権の施策と主要動向

モラレス大統領は、就任に際し、500年余にわたる植民地主義の遺制を破壊し、「民主的平和的革命」により新たに国を造り直すことを宣言。選挙運動から10大課題を掲げていましたが、その中で、特に、改憲議会の開催、炭化水素資源（天然ガス）の国有化、農地改革、地方自治等の問題に優先的に取り組みました。（1）改憲議会問題では、3月に改憲議会召集法を成立させ、7月に議会選挙実施、8月に改憲議会発足と迅速に進めました。しかし、議会発足以降は、審議や採決の方法等最初のルール作りから与

野党が激しく対立して日程が大幅に遅れ、2007年12月に強行採決により第一次草案が可決されましたが、2008年7月現在、正式草案作成に必要な国民投票はまだ実施されておらず、新憲法成立の具体的時期の見通しは立っていません。(2)炭化水素政策については、メサ政権時代に成立した新炭化水素法の具体的実施措置を決め、10月それに基づき、ボリビアに進出している石油企業全社との間でボリビアの取り分を大幅に増やす内容で契約改正を実現しました。しかし、その後、期待された新規投資が進まず、最近、生産の低下が指摘されています。(3)農地改革については、関連法案の審議が、野党が多数派を占める上院で滞っていましたが、11月、地方から集結した約5000人の先住民・農民集団の示威行動の中、一部の野党議員の支持取り付けにより、法案を可決、成立させ、翌2007年6月、農牧業関係団体との合意のないまま同法の施行規則を公布しました。今後の実施過程で軋轢が生じることも懸念されています。(4)地方自治問題では、7月、地方自治推進の賛否を問う国民投票が実施されました(賛成4県、反対5県)。賛成が多数を占めた半月地方4県では、政府側からの憲法違反との警告に拘わらず、独自の自治条例案を作成、2008年5~6月に県民投票を実施し、更に具体化を進めようとしています。(5)対外関係では、ベネズエラ、キューバとの緊密化が顕著に進み、一方、米国との関係も、色々摩擦を起こしながらも、実体的には大きな変化はないまま継続されています。

## モラレス政権、当面の評価と見通し

国の根本的な造り直しを唱えてモラレス政権が発足して2年半以上経過しました。高い志にかかわらず改革の基本的武器になるはずの新憲法の作成作業が大幅に遅れています。主に外国資本を相手とする炭化水素資源(天然ガス)政策では国内的に大きな抵抗はありませんでしたが、土地の収用問題の絡む農地改革政策では、サンタクルス県中心の半月地方の強い抵抗にあっています。半月地方が地方自治権の拡大を強く求めている背景には土地問題があると言われています。経済政策面では鉱山、通信分野で、法律改正や、かつて民营化された企業の再国有化(政府による過半数のシェア回復)の試みが進められていますが、それ以外見るべきものは乏しく、学齢児童補助金、高齢年金の引き上げ、(ベネズエラ援助による)市町村への小切手手交等人気取りとも見られる対応が目立ちます。しかし、最近の天然ガスや鉱物資源の価格の高騰がこれら施策、更に好調なマクロ経済指標の維持を可能にし、モラレス政権に追い風となっています。この追い風が吹いているうちに、しっかりした経済と政治の基礎を固めることが出来るかどうか今後のモラレス政権の帰趨を決める重要事と思われる。選挙で大勝したとはいえ、国会上院で過半数に、改憲議会で三分の二に至る議

席を得られていないことは、「民主的平和的」に革命的改革を遂行する上で大きな足枷となっており、これからもモラレス大統領の試練は続くと思われます。しかし、対話とコンセンサスの重視が先住民社会の伝統的価値観であり、文化だと言われており、それを背景に持つモラレス大統領にとり、今まさにその真価が問われているのではないかと思います。

## 友好的な日本・ボリビア関係

## 良好な日本・日本人のイメージ

### 経済援助に労組・農民組織指導者も謝意

日本とボリビアの関係は伝統的に友好的で、ボリビアにおける日本及び日本人のイメージは良好です。私は着任後、かなり時間をかけて、政府要人はもちろん、議会・政党関係者、経済界、ジャーナリスト、有識者・文化人、更に労組・農民組織指導者等出来るだけ幅広く表敬訪問しましたが、皆一様に日本のことを誉めてくれます。政府や与党関係者の場合ならば、ある程度的外交辞令として割り引いて考える必要もあるでしょうが、労組・農民組織指導者達からもわが国を評価する言葉を聞いた時は、嬉しい驚きでした。彼らが決まって口にしたのは、わが国の経済援助への謝意でした。また、在任中、ある世論調査が何回も行われ、移住したい国についての質問がありましたが、日本は米国、スペイン及び近隣国と並び常に上位を占めていました。対日イメージが良好な背景理由としては、基本的には、独自の文化、歴史、優れた科学技術力を持つ豊かな国という日本そのものに対する評価があると思いますが、日本が長年かけて行ってきた経済援助の効果が大きいようです。特に、日本の援助が自国の利害や何らかの取引のための条件を付けた援助でないことを高く評価しています。更にボリビアの場合、移住者の活躍も、この良好な対日イメージ醸成に貢献していると思います。

### 2007年3月、モラレス大統領日本公式訪問

就任直後より大統領の日本訪問への関心表明はありましたが、その意向が明確に示されたのは、2006年の日本では秋も深まっていた頃でした。日本の外務本省側が迅速に反応し尽力してくれたお蔭で話は異例の速さで進み、実務訪問賓客として具体化しました。ただし、その過程では現地サイドで緊張する瞬間もありました。日本での天皇陛下、政府首脳との日程が大筋固まった段階で、大統領府大臣、外務大臣と一緒に打ち合わせをしていた時、先方より、訪日日程を全体で5日間で収まるように調整出来ないかと言ってきたのです。大統領が国を5日を超えて不在にするときは国会の承認が必要ですが、色々な懸案を抱え野党と厳しく対立していたため、その

巻添えで日本訪問の国会承認が得られるかどうか確信がなく、大統領も深刻に心配しているというわけです。実際、少し以前に、欧州と中南米の幾つかの国を続けて訪問しようとして国会の承認が得られず、一旦帰国してとんぼ返りでまた出かけるということがありました。しかし、こちらとしてはとんでもない話で、先ず物理的にみて往復の移動だけで5日間かかり、仮に専用機で最短ルートを飛び、乗り換え時間を節約しても日本滞在時間は極めて限られたものになります。また陛下、総理等との日程を直前に調整し直すことも事実上不可能です。ここは国会の承認取り付けという正面突破しかなく、初め自信なさそうにしていた両大臣の了承を得た上で、私自身、その日のうちに、幸い個人的知己関係にあった野党三党の党首あるいは幹部5人に、面談または電話で頼み込み、「大統領の訪日に反対しない」との言質を取り付けました。これで政府も覚悟を決めたのか、直前の日程変更の話は沙汰済みになりました。

(後日、訪日案件は国会で長時間かけて審議されましたが、最終的には満場一致で承認されました。)

モラレス大統領の訪日は3月上旬、3泊4日の日程で行われ、陛下、総理、外相の他、国会議員、JICA、JETRO等政府関係機関、鉱業・有機産品関係企業等との会談や講演会、記者会見等大変濃密なスケジュールがこなされました。1年少し前まで農民、先住民組織のリーダーとして、長年にわたり、時には瀕死の重傷を負うような弾圧を受けながらも時の権力と戦い、デモ行進や道路封鎖等の荒事の指導もしてきた人がどのようなパフォーマンスを示すのが注目されましたが、大統領は、率直かつ謙虚で誠実味のある人柄、国の改革にける情熱で、日本で会ったほぼ全ての人々に強い印象を与え、好感をもって受け止められました。そして伝統的な2国間の友好関係が新たに確認、強化されました。(エピソードも交え)印象深く感じたことを若干紹介します。

## 好感をもって迎えられた大統領

大統領が日本に伝えたメッセージの一つは、日本とボリビアは国力、民度など様々な点で違うが、基本的なところで大きな共通点がある、それは両国とも平和を愛好し、自然環境を大事にする点である、日本の援助理念の「人間の安全保障」とボリビアの国家開発計画の基本理念の「尊厳ある生き方」(vivir bien)には共通点が多い、そのような日本と戦略的パートナーとして一層の友好協力関係を築きたいということだったと思います。

一行来日直後、同行者から、日本の憲法第9条のテキストを見せて欲しいと言われました。モラレス大統領は訪日中に国際社会に向け重要な宣言を発表する、それは、ボリビアは紛争解決手段としての戦争を放棄することとし、その旨現在憲法改正議会で審議中の新憲法に盛り込むというのです。この方針は、大統領より記者会見の席で公表され、一部の新聞

が取り上げただけで余り大きな反響は見られませんでした。ボリビアがこのような画期的な政策を、大統領の日本訪問中に国際社会に向けた重要メッセージとして発表したことは、日本がそのような特別な価値をもつ平和愛好国家として見られていることの反映として興味深く思われました。

## ボリビアの日本人移住者・日系人

### ボリビア移住二つの波 19世紀末と戦後

現在ボリビアには日本人が約2800人、日系人1万数千人(推定)が在住しています。日本人のうちいわゆる長期滞在者は300人に満たず、残り約2500人は永住者で、その大部分が、東部平原地方のサンタクルス県にある“オキナワ”及び“サンファン”の2つの日本人移住地及びサンタクルス市に住む移住者の皆さんです。首都ラパスは、サンタクルスに次ぎ日本人の多いところで、その日系社会は大変古い歴史を持ちますが、現在、人数的には、大使館、JICA関係者等長期滞在者を除くと100名弱とはるかに小さくなります。1万数千人の日系人の在住地域は、全国的に幅広く広がっていると思いますが、中心地は北部ベニ県です。

ボリビアへの日本人移住は大きく分けて二つの波がありました。

第一の波は、1899年、当時、自動車のタイヤの原料としてのゴムの需要が大きく、「ゴムブーム」に沸いていたボリビア北西部に、同年、日本からの最初の移住者としてペルーに来ていた日本人の一部が入国したのを嚆矢とします。したがって、ボリビアは南米でペルーと並び最も古い日本人移住の歴史を持つ国で、1999年にペルーと同時期に日本人移住百周年を祝っています。その後、主としてボリビア北西部のパンド県、ベニ県のアマゾン地方に、ゴムブームが続く1920年代頃までの間に、正確な数字は不明ですが相当数(数百人から2千人とも推定されています)の日本人が入りました。これら日本人はいずれも単身で、その多くが現地の女性と家庭を持ち、今日、1万数千人と推定されるベニ県、パンド県を中心とするボリビア日系人の第一世代を成すことになりました。

### 忘れてならない戦後最初に日本人移住の門戸を開いた国、ボリビア

日本人のボリビア移住の第二の波は、戦後の政府間の移住協定をベースとする計画的集団移住です。終戦直後、荒廃した国土に多くの海外からの引揚者を抱え、新しいフロンティアを求めていたわが国に対し、最初に門戸を開いてくれたのがボリビアであることを忘れてはいけません。(わが国との移住協定締結は、ボリビアが1956年、パラグアイが



1959年、ブラジル及びアルゼンチンが1963年。)ボリビアへの戦後移住の第一陣は、1954年、今日のオキナワ移住地に入植した人達です。翌1955年にはサンフアン移住地の開拓が始まりました。経済的、社会的インフラの乏しい中で、原生林を切り開いての開拓の歴史は、色々な開拓の記録や資料等に残されていますが、その本当の困難、ご苦労は、それを生きた人以外の者が、軽々しく、表現したり、想像することができないほどのものであったことと思います。両移住地は、今日では、米、小麦、養鶏、牧畜、果樹等の多角的営農活動を展開し、ボリビア農村開発のモデルの一つとさえ言われるほど高い評価を受け、それぞれの名を冠した地方行政単位(町村)として認められ、堅実かつ安定した地位を占めるに至っております。

### 3大居住地の移住50周年記念に大使として立会い名譽

私のボリビア在任期間中に、戦後の日本人移住者の3大居住地域であるオキナワ移住地、サンフアン移住地及びサンタクルス市日本人会がそれぞれ入植あるいは発足50周年記念日を迎え、それに立ち会うことが出来たことは私にとり誠に幸運でまた名譽なことでありました。特に2つの移住地の場合は、ボリビア政府も関与して開始された移住地でもあり、ボリビア政府側にもお祝いしてもらいたいと考え、大使館としても微力ながらボリビア政府関係者の参加を働きかけ、2004年8月のオキナワ移住地入植50周年式典には、カルロス・メサ大統領、2005年8月のサンフアン移住地入植50周年式典には、アルマンド・ロアイサ外相以下4人の閣僚の参加を得て、式典は厳か、かつ盛大に行われました。両移住地はそれまでも節目に何回か周年式典を行っていましたが、オキナワの式典に現職の大統領が参加したのは初めてで、また外相を含む4人の閣僚が参加したのも初めてのことでした。

またオキナワ移住地の場合、移住開始時点では沖縄が米国の統治下にあり、米国政府から様々な支援を受けた経緯があることから、式典には在ボリビア米国大使も招待されました。米国大使(当時)は、この招待を大変喜び、夫人と子供二人の家族全員を伴いラパスから車で駆けつけ、メサ大統領、稲嶺知事他本邦からの参加者等と一緒に式典を祝い伝統的沖縄芸術を楽しみました。

オキナワ移住地が沖縄県出身者から成っているのに対しサンフアン移住地の場合は日本の様々な県出身者で構成されており、この意味で、より全国的性格を持っていると言えます。サンフアンの50周年式典に際しては、関係者の強い要望が叶い小泉総理大臣(当時)より「拓けゆく友好の架け橋」の揮毫が送られ、それが刻印された碑が建てられました。



オキナワ移住地入植50周年式典で挨拶する筆者

## 日本のODAと日本人移住者・日系社会

このように戦後移住も半世紀を経過し、日本人移住者の皆様はボリビア社会にしっかり根を下ろし安定した地歩を築かれています。ただし、安定しているとはいえ、移住者社会の活動の基盤となっている農業は、産物の市況の他、気候条件の影響を強く受けるため、雨期には水害、乾期には干害等の心配は常にあり、現に最近数年の異常気象による水害により日系移住地も大きな被害を被り、その修復や今後への備えなどで大変な苦労をされています。日本政府からの日本人移住者に対する直接的支援が極めて限られている今日、例えば水害による堤防決壊の修復や道路建設等インフラ整備は現地政府側にお任せざるを得ませんが、ボリビアのような南米最貧国では資金的余裕は元々ありませんし、また、より大きいニーズを持つ多くの貧困農民がいる中で日本人移住者を特別優先的に支援することには困難があります。日本のODA(政府開発援助)が、引き続き、ケース・バイ・ケースで、日本人移住者・日系社会にも裨益活用されるよう適宜工夫されることが期待されます。

### モラレス農地再配分政策の日本人農業者への被害防止に対応を

なお、モラレス政権は、大土地所有の廃止と貧困農民への土地配分等を重要政策として進めようとしています。この政策自体は、ボリビアの貧困削減、社会公正の観点からも、もっともな政策で、それが日本人農業者を想定したものでないことも明らかです。ただし、このような政策が推進されている状況下では、いわゆる土地不法占拠のような動きが鼓舞されかねません。とばっちりに日本人農業者が被害を受けるようなことが起こらないよう、日本側関係者が協力し合い、ボリビア政府側に対する申し入れ、日本人農業者側における、法令規則の遵守や相手につけ込む隙を与えないような普段の努力、注意を続けることが重要だと思います。

2005 年大統領選挙の最大政党の  
大統領候補、駐日大使も二人目

ボリビアにおける日系社会は、絶対数として大きくありませんが、ボリビア全体の人口が約 900 万人で、国土（日本の 3 倍）の割には少なく、中産階級になるともっと限られてくるので、特に一定の階層の間では、それなりの存在感を持っています。特に戦後移住者はサンタクルス県に集中しているので、同県では相応の重みを持つ存在となっています。私もボリビア在任中色々なボリビア人と知り合いましたが、特にサンタクルス県出身者の場合、何らかの形で日本人の知り合いがいるという人が案外多くいました。日系社会も、新たな世代が出てくるに従い、農業分野のみならず、商業、加工業、更に医師、弁護士、技術者、教職員、軍人等幅広い分野へ人材を輩出するようになっていきます。中には、例えばペドロ・シモセ氏のようにボリビアを代表する詩人の一人と目される人もいます。現在のアシミネ駐日ボリビア大使は日系人大使として二人目です。日系人の政界進出は非常に限られていましたが、先般の 2005 年末の大統領選挙で、ボリビア最大の伝統的政党である MNR の大統領候補として、それまで殆ど無名の日系 2 世ナガタ二氏が健闘したことは当時日本でも報道されました。同氏は、大統領選挙では敗れましたが、現在、下院議員で下院の外交委員長として活躍されています。

私事で恐縮ながら、ボリビア在任中、同国最高峰のサハマ山(6542m)に登頂する機会を得ましたが、その時ボリビア山岳会会長の推薦でガイドをしてくれたのが図らずも日系人でした。

ボリビアの日系社会が更に広く深く根を下ろし、日本ボリビアの友好の架け橋として益々発展されることを心より念じております。

(編集部注：本稿は海外日系人協会のご好意により同協会機関紙『季刊海外日系人第 63 号』に掲載されたものを転載いたしました。)

.....  
会報名「カントウータ」の由来： -  
カントウータはボリビアの国花。低地に咲く花で花弁は赤、花弁の付け根は黄、茎は緑でボリビア国旗と同じ色。誰にも愛されるこの花は当協会誌の名にふさわしく、名づけました。  
.....

インカからジパングまで NO.13

杉田房子(旅行作家)

実際、ベネズエラとは地続きのコロンビアのカルタヘナ港で、帆船に寄ってくるインディオの物売りの小舟にも、じゃがいもはほとんどなかった。長く保つ上に、さっぱりした味のじゃがいもを欲しがるとスペイン人の船乗りは、物売りの掛け声にも文句をつける。

「パタタなんていうが、パタタじゃないか」

アンデス山地のパパスは、スペイン人の間でパタタと訛られていた。しかし、ひょっとすると、それはカルタヘナ港のあるコロンビアや、地続きのベネズエラに住むインディオの言葉だったのかもしれない。カルタヘナでカリブ海に注ぐマグダレナ河の源は、アンデス山地の東側を遡るところにあるが、途中で合流するカウカ河は西側が源流になる。山を縫い、密林を分け、川を下る複雑な道程の間に、同じ南アメリカ大陸の人間の間でさえ、パパスがパタタになっても不思議はなかった。

帆船に乗せられたインカの男女には、じゃがいもをめぐるそうした船乗りと物売りのやりとりよりも、物売りのインディオと小舟のほうが珍しい。樹皮が葉で体の股を覆うだけの姿は、パナマ地峡のインディオよりもっと裸だった。パナマで真珠をとっていた船には帆があったが、ここでは丸太をくりぬいただけなので舟まで裸に見える。

インカの筏も丸太をつなぎあわせてただけだが、外海に漕ぎだす丸太はバルサの巨木で、帆もかける。この地では裸の人間が裸の小舟に乗り、ちっぽけな櫂で往来したり、外海はるかまででていく。その危なっかしさには、目が離せなかった。

カルタヘナ港をでた帆船は、船首に碎ける波の余波で、小舟の群を木の葉のように舞わせる。沈んだかと思えば、何事もなかったように波間から現れる。見まわすと、島や岩礁や洲が無数に浮かんでいた。

こんなに島がある間を縫うのでは、裸みたいなあの手漕ぎの舟がいいのかもしれないー。

アンデス山地でなければ太平洋しか知るはずがなかったインカの男女はようやく納得した。

しかし、島の間を縫うどころか、新世界が初めて発見されたバハマ諸島からハイチ島へ、さらにキューバ島へ、潮流の強い海を小舟のカヌーで渡るインディオの姿に、コロンブスは早くも 1492 年の第一回目の航海で驚嘆している。なにしろ、その海で彼は率いる 3 船のうち一隻を座礁させて失ってしまったのだった。

インカの男女を乗せ、じゃがいもを積んだスペインの帆船が、いま向っているヒスパニオラ島のハイ

チで、コロンブスはその船を失ったのだが、島で得たものに比べれば、失った船の損失などたかが知れていた。

船は葡萄酒にして200樽を積むのがせいぜいの大きさだった。葡萄酒2樽を船艙に積む容積が1トンとされた当時では、100トンそこそこの帆船ということになる。それを失った代償に、コロンブスはまず自分自身の名声を得た。黄金も得たし食物も得た。新世界に初めて着いた翌1493年の1月16日にヒスパニオラ島をでてスペインへの帰路についたコロンブスは、早くも10日後の1月25日に、すべてじゃがいもと思ひ込んだアヘスカニアメスカニアヘスカ、いずれにしても島で積み込んだイモ類やトウモロコシ以外にはかすかのパンと葡萄酒だけしか食糧がなくなった、と航海日誌に記している。島で得たパタタのじゃがいもやパタタのサツマイモなど食糧がなくなれば、黄金の輝きもコロンブスの名声も、大西洋上の飢えと渇きで消えてなくなっていたかもしれないのである。

「ヒスパニオラだぞ」

船乗りが叫ぶ。カリブ海のゆったりしたうねりが、ちらちらと波頭を白く砕けさせはじめた先に、東にはなだらかな平地がつづき、西には緑の茂る丘が黒々とした山脈にせり上がる陸影が浮かんでいた。近づくとつれて、石造りもがっしりとそびえる砦と、これも石造りの教会を家並みが姿を現す。

スペイン人だけでももう1万5000人も住んでいたヒスパニオラは、船乗り人夢の港町だった。本物のパンと酒があり、スペインの女がいた。本国から移植したオレンジやメロンが香り高く、移畜した牛のステーキに舌鼓も打てる。

飄々と海風が吹くなかで、昼は太陽が輝き、夜は月光に蒼いヒスパニオラは、スペイン人にとっては新世界そのものに見えた。半世紀前まではスペイン人の影もなく、インディオがホィーオと呼んでいた静かな島ということは、もう想像するのむずかしい。

## 旅から生まれた詩

### 予感 ティティカカ湖畔にて

細野 豊（詩人）

ボリビアは、五階建ての国だと言われている。南半球の赤道からさほど遠くない南緯10度から20度位に位置しており、一階に当たる海拔400米未満の平野部は、一年中草木の緑に覆われた亜熱帯や熱帯である。

二階に当たる峡谷地帯は、ユンガスと呼ばれ、海拔2,000米以下の地域で、気候的には亜熱帯に属し、ココインの原料にもなるココ茶の産地として知られている。三階は、海拔2,000米から3,000

0米に位置する温帯地域で、年間を通じて気温が20度前後の温暖な地帯である。

四階は、海拔3,000米から4,000米位までのアルティプレーノと呼ばれる高地平地地帯で、馬鈴薯の原産地として知られ、リヤマ、アルパカ等当地特有の動物（ラクダ科）が飼育されている。

五階は、5,000米から6,000米級の一年中白雪を頂く高山が連なる山脈で、コルディリエラと呼ばれている。

日本は、四季の変化に富み、美しい自然に恵まれた国であるが、ここで人々は常に新たな季節の訪れを待つ受け身の存在である。一方、ボリビアのように赤道に近く、激しい高低差を持つ国では、人々が自ら季節を選び取ることが出来る。一階の夏地帯に住む人々は、春や秋を求めて三階地帯へ、冬を求めて四、五階地帯へと旅をする。その逆もある。

私も亜熱帯平野に位置するボリビア第二の都市サンタクルスに住んでいた頃（1970年代）この国の実質的首都であるラパス（海拔3,800米、憲法上の首都は最高裁判所があるスクレ）やティティカカ湖（海拔3,815米）方面へ旅をした。

その時に出来たのが、「予感 - ティティカカ湖畔にて - 」という詩である。

湖から吹く風はかすかに潮の香りがする  
日はいつも陰って  
波頭がわずかに白くくだけている

当時私が家族とともに住んでいたサンタクルス市は、一年中町全体が草木の緑に覆われ、濃緑の葉が散るとそのすぐ後から新緑の葉が芽吹いてくる場所であった。

景色はあくまで明るく、緑、赤、青、黄色等の原色が溢れ、年間を通じて殆ど変化しない。人々は折々に咲く花を見てわずかに季節の移り変わりを感知する。

そういう土地からティティカカ湖への移動は、まさに夏から冬への旅、明から暗、賑わいから寂寥への旅であった。湖上に日は照っていてももうすら寒く、岸辺の木々は黒ずみ、湖面は翳りに覆われていた。

海拔3,800米あまりの岸辺に立ち男は遠く  
原点を探し求める

そのまえを黒い帽子をまぶかにかぶったインディオの少女が右手で小枝をうち振りながら羊の群れを追っていく

（沖には小舟がただひとつ漂っている）

低地から海拔4,000米近い高地へ登ると人は殆ど皆高山病に苦しめられる。頭痛がし、思考力が鈍り、唇は乾きひび割れる。

それにしても、この陰鬱と寂寥そして死の予感はどこから生まれてくるのか。



はるか沖合の、小舟が一艘揺れている辺りか。  
人も動物もいないわけではない。  
羊を追う少女がおり、畑を耕す農夫がいる。  
それなのに、どこからか湧き上がってきて、心を  
脅かすこの孤独感。

どんなに視線をあげても見えはしない。  
いつまでもこの湖畔にじっと座りこんでいたいほ  
ど身を刺す寂寥の湧きだしてくる位置はいくら遠く  
を探してみても見えなかった予感の原点。  
ふと気づいてみれば、寂寥はあまりにも身近な所、  
自分自身の心の底から湧き上がっているのがあった。  
湖のはるかむこうは深く切り立つ断崖でその底は  
熱帯雨林である

右の終連は、別の機会に体験した、ブラジルのア  
マゾン地帯に隣接するベニ州のトリニダーヤリベラ  
ルタへの旅から連想された。それはサンタクルス市  
から移り住んだラパス市からの旅であったが、曲り  
くねった坂道を登り切った高地平原にあるエルアル  
ト空港を飛び立った小型機は、西方の切り立つ断崖  
へ向かって飛んだ。断崖を越えると、はるか眼下に  
はベニ州の熱帯雨林が広がっていた。

悪天候のため、小型機は揺れに揺れ、私は座席の  
斜め上の吊り革をしっかりと右手で掴み、足を踏ん  
張った。だが、当然のことながら、足元はまことに  
心許なく、不安の中で翻弄され続けた。隣の席  
にいた同行のカトリック教会の神父も吊り革に身を  
委ね、一心に神に祈っていた。

ようやく到着したトリニダー空港から見上げた断  
崖の上部が厚い雲に隠されているのを見て考えた。  
「確かに寂寥は俺の内部から湧いている。しかし、  
その先を更に辿れば、この熱帯雨林こそ原点なの  
ではないか」と。

そこから、寂寥は熱気と湿気を孕んでアマゾン河  
をゆっくりと下り、マナオス市の、十九世紀初頭の  
ゴム景気の時代に建てられたオペラハウスを過ぎ、  
サルバドル市の、十六世紀に作られた黒人奴隷市場  
を通過するうちに、様相を変えつつ南下した。そし  
てこの寂寥は、リオデジャネイロのカルナル（謝  
肉祭）のパレードで今も黒人やムラト（黒人と白  
人の混血）たちが、サンバのリズムに乗って汗とと  
もに発散する、むせ返るような悲しみに通じてい  
るのであった。

（詩誌「日本未来派」第 209 号より転載）

## 親の心・子の想い

移住した一世の「親の心とその子に託する期待」  
と現地で生まれ育った二世の「子の想いと生き方」  
との『世代間のギャップ』を著者自らが、「旅の文化  
研究所」の協力を得て、沖縄移住地においてフィ  
ールドワークして見事に浮き彫りにしている（編集部）

### 1 - 2 . 移住地小史

武庫川女子大学 生活美学研究所  
元助手 柏木 舞子

すでに見た現状について、コロニア・オキナワの  
歴史的な考察に入る。

1945年8月15日、第2次世界大戦が終わった。戦  
禍によって、沖縄県が廃墟と化したことは、周知の  
通りである。敗戦後には、米軍基地建設という名目  
で土地の接収が強行され、県民の生活はさらに逼迫  
した。県民の生活ぶりは、ボリビア在住の沖縄県人  
たちにも知らされた。そのため、悲惨な境遇にある  
母県の人々を救おうと、ボリビアの各地で救援会が  
組織された。

このことが、コロニア・オキナワの形成を促進した。  
その原点は、ボリビア北部 ベニー州リベラルタ市で  
結成された「救援会」にある。というのも、彼らの  
活動は、母県の人々への金品の援助 だけに留まらな  
かった。目標は、ボリビアに移住者を迎え入れて沖  
縄村を建設することに定められていたのである。そ  
して、1949年12月25日、リベラルタ市の沖縄県人  
会総会において沖縄村の建設が決議された。

こうした経緯を経て、リベラルタ市から先遣隊が送  
り出された。1951年7月15日、久場良明、島袋庄  
七郎の二氏が、移住者の最初の入植地となる「うる  
ま植民地」へ入っている。原生林に覆いつくされた  
土地での生活は、苦渋に満ちたものであったらしい。  
久場良明氏は、その想いを、次のような琉歌に遺し  
ている。

あわりさびしや 胸の内にかくち わしたせる仕事  
世界に知らさ

（あわれや淋しさは胸中に秘めて、自分たちが手が  
けた仕事を世界に示そう）

一方、琉球列島米国民政府を主体とした移住者の受  
け入れ体制の整備も、着々と進行していった。その  
一環として、研究者による南米の現地調査が実施さ  
れている。

たとえば1952年5月12日、北米スタンフォード大  
学教授 ジェームス・L・ティグナー博士が、南米視  
察のためにボリビアに入国している。渡航の目的は、  
北米太平洋科学研究所、琉球列島米国民政府ならび  
に琉球政府の委託を受けて、南米の沖縄県出身者の  
活動状況を調査するためであった。

調査の結果、ティグナー博士は、うるま植民地への  
移住を促し、彼の意向をもとに「うるま移住十周年  
計画」が立案された。移住地の整備と移住者の渡航  
にかかる費用は、琉球列島米国民政府の予算によっ  
てまかなわれることが決まった。

その後、移住者の公募が開始された。1954年3月  
23日付けで、南米ボリビア農業移民募集要項が制定  
され、各市町村に配られた。筆者は、新聞紙上でそ  
の募集を知ったという第1次移民団の日系1世から、  
当時の事情を聴取する機会を得た。彼は、募集記事  
には、以下のような条件が記されていたと回顧する。

1. ボリビア政府より、50町歩の土地が無償で与え

られる。

2. 渡航費は、琉球政府が全額貸与する。

3. 移住地には、移民団の現地到着までに、道路・受け入れ小屋・飲料水等のインフラ整備がなされる予定である。

募集の結果、沖縄全島から、定員をはるかに上回る4,000名あまりの応募者があった。選考は、2段階に分けて行われた。まず、市町村における第1次選考で2,000名に絞られた。1次選考の通過者は、同年に発足した海外移住送出審議会における1週間におよぶ最終選考に参加した。第1次移民団には400名（うち単身者80名）が選ばれ、5月3日付けの新聞紙上で合格者の名前が発表された。

合格者がポリビアへと旅立ったのは、1954年6月19日のことである。第1陣275名が那覇港を出発した。3ヶ月余りの航海と陸路の旅を経て、うるま植民地へ入植したのは、8月15日である。それは、奇しくも第2次世界大戦の終戦記念日と重なったのであった。

移民団はその後、過酷な運命をたどることになる。たとえば同年10月30日、初の犠牲者がでた。45歳の男性である。当初は風邪が悪化し、肺炎を併発したものだと考えられていた。しかし、その男性が罹患したのは伝染病であったという見方が強い。病人の数は日を経るごとに増えていった。最終的には、400名の移住者のうち85名が罹患した。原因不明のその病気は「うるま病」と名づけられ、1955年4月までに15名が犠牲となった。

だが、移住者たちが、日本へ帰国することは不可能であった。それは、経済的な事情による。当時の日本からブラジルのサントス港までの船賃は102,000円（小児運賃は半額）であった。親子5人家族を想定すると、およそ40万円が必要となる。

そこで1955年当時の日本人の平均年収を思い出しておこう。それは、わずかに186,480円であった。40万円は、その2倍以上の金額である。帰国が不可能であった事情が判明しよう。

経済的な負担が少ない単身移住者にも、帰国できない理由があった。彼らは、逃亡防止のためにパスポート（琉球列島米国民政府身分証明書）を、取り上げられていたからである。



図2：ロイヤル汽船チシャダネ号でポリビアへと旅立つ移民団（1954）

（提供：オキナワ日本ポリビア協会）

病に倒れる人が続出する中で、移住者たちは、迫り来る死の恐怖におののいた。しかし、上記の理由で、ポリビアの地を離れることができない。元気な者は、飲酒と三絃（サンシン）の演奏によって気をまぎらわせた。仲間の葬式がとりおこなわれた日の夜に、宴会を催したこともあったという。

「そうせずには、どうにもやりきれなかった」

生き残った人々の言葉である。

結局、移住者たちは、「うるま病」を、伝染性の風土病であると判断した。そこで、転住を決意する。1955年6月24日、移民団の本格的な移動が開始された。入植からわずか10ヵ月後のことであった。

しかし、再入植したパロメティア移住地では、全移住者が必要とする8000町歩の土地を確保することができなかった。そのため1956年9月16日、現在のオキナワ第1移住地への、再々入植が開始される。10月3日、すべての移住者の移動が完了した。

やがて土地の配分が決定し、一世帯あたり50町歩が振り当てられた。しかし彼らは、2度にわたる土地の移動、病気治療費のために出費がかさみ、ほとんど無一文の状態に陥っていた。



図3：第1移住地中心部。原生林に囲まれていた（1956）（提供：オキナワ日本ポリビア協会）

移住者たちは、原生林に覆われた土地の開墾作業に明け暮れた。開墾した土地は畑として整備され、主食の陸稲を栽培した。その裏作や間作にはトウモロコシが植えられた。これらは換金作物であると同時に、自給自足の糧ともなった。しかし、作物の収穫高は、大陸特有の激しい気候の変化に左右されざるを得なかった。

さらに、生活面でも不安は多かった。保障されていたはずのインフラ整備はことごとく滞り、移住者たちは不便な生活を強いられた。こうした問題が解決されるには、長い時間が必要であった。いや、今なお解決されていない問題も少なくない。生活をめぐる問題の事例を、つぎに列挙しておく。

1962年に打ち込み井戸が設置されるまで、くぼ地にたまった雨水や河の濁水を澄まして飲用した。電化が実現したのは1979年である。それまでランプの灯りに頼って夜を明かした。

雨季がくるたびに道路は浸水し、移住地は陸の孤島となることも少なくなかった。道路のアスファルト舗装は、2003年現在にいたっても実現しきれていない。

このような状況が続いたにもかかわらず、沖縄からの移住者はその後も途絶えることがなかった。第1移住地の満殖により、1959年には第2移住地へ、1962年には第3移住地への入植が開始されている。結局、移民団は第19次まで編成され、41回にわたって送された。

ちなみに、2002年9月現在、移住地の日系人の人口は867人である。単純計算すると、定着率は25.8%となる。しかし実際は、20%以下ではないかという見方もされている。

結果的に、多くの移住者たちが、コロニア・オキナワを去ることになった。定着できなかった理由は、さまざまである。たとえば、営農の不振、戸主の死亡、他国の親戚縁者の呼び寄せなどがあげられる。彼らは、ブラジル、アルゼンチンなどへ転住していたのであった。(次号につづく)

## 集団移住地造成雑感

白石健次(農業技術士)

### 開発の実施

私は、イグアス移住地7万8千ヘクタールの開発を実施するに当たって、航空写真測量を実施して地形図を作製したが、この地形図作製だけで猛反対があった。費用をかけ過ぎると言うのである。当時、日本国内では緊急開拓でUSA指導による調査要領で、この地形図を基に、土壌調査、道路の測量調査を行い、土地分類図、土地配分図を作成、工事計画による予算、営農計画による入植農家の収支等を完成させ、実施に入るのが常識であったが僅かに1千5百万円の航空写真測量さえ、猛反対に遭ったので、あとは出たところ勝負の作業要領で進めざるを得なかった。国内開拓に比べ、振興会社、後続の移住事業団が如何にラフな仕事しか出来なかったを数字で比較してみたのが下記である。

記

国内開拓1戸当事業費	1,607,000円
移住地の1戸当事業費	509,478円
国内開拓相当事業費	304.502円
移住地の相当事業費	43,452円
従事技術者数 国内 推定見込	3000人以上
従事技術者数 移住地 実数	15人

「注」国内開拓1戸当事業費は農林省農地局の実績値、移住地の1戸当事業費は振興会社分譲価格によった。分譲価格には本社経費や金利が入っているので、50%引きにすべきであるが、一方物価水準は約50%高いので、50%増にすべきであるが相殺して、生数字で比較表を作った。技術者数は名簿類である程度見当をつけ、地方局数値したものであるが、総技術者の数は全く入っていないから、実際はもっと多くなる筈、技術者数は農業土木技術者のみを数えたもの、振興会社、移住事業団の技術者が如何に無理な仕事をやらされていたか分ると思う。

### ドミニカ移住地の特殊事情

この移住地の問題は、適地調査と言うよりも爾後処理の遅れにあったと思う。適地調査は土地条件において、一部に地味に関して疑問を抱く処もあったが、全体としては普通に行われており、適地調査員が責任を問われることはないと思う。幸い私も現地を見ており、又親しくしていた、フリージャーナリストから、此の移住地の創設に関した故上塚司氏の遺稿類コピーを基に詳細の話を聞いているので、問題点をかなり分析できたと思っている。

ドミニカ共和国のトルヒヨ大統領は、全氏名で書くと、ラファエル・トルヒヨ・モリーナとなる。1930年政権を取って以来、独裁を続け、1951年に弟のユワトル・トルヒヨ・モリーナに大統領の席を譲ったが、自らは大元師になって、実権を握って院政を敷いた。軍人である彼は、当時、負けたとは言え大国USAと勇敢に闘った日本人を好み、日本人をドミニカに受け入れることを考えた。在日大使グスマン・サンチェ氏を通じ、日本の外務省に対し、度々日本人移民受入れを申し入れた。そこで衆議院外務委員会の委嘱を受け、上塚代議士が、昭和29年10月、ブラジル・サンパウロ市創設400年祭に出席の帰路、ドミニカに立ち寄り、最初外務大臣、内務大臣、農林大臣に会い、日本移住者送出受入の諸条件を申し入れておいて、2日間おいて、トルヒヨに面談した。トルヒヨは丁重に出迎え、受入れ条件の手書文書を示した。上塚氏はそれを確認して帰国、外務委員会に報告した。外務省は昭和30年10月適地調査団として、吉岡章氏他2名を現地へ送った。その報告書の中で吉岡氏は、トルヒヨは独裁者だから、実現性はあるが下部事務当局との間に意見の食い違いがあり、これが移住を進める上での支障になるかも知れないと述べていた。

昭和31年7月にはダハボン移住地に第一陣が入植、以後コンスタンサ、ドベルヒエ、ネイバ、ハラバコア、アグアネグラと次々に、入植が実施された。昭和33年3月上塚司氏はアマゾン地方へ出張時に、ドミニカに立寄り、ネイバを除く、各移住地を廻り、状況を視察した。その時の模様は、集団帰国後の昭和37年2月8日衆議院決算委員会で、参考人として招致された時に、用意した原稿の中で明にされて

いる。各移住地共に作物の出来も良く、生活条件も取り決め通り実行されていた。ただ土地面積だけが不足していた。ダハポンを例に上げると、与えられた面積は100タレアで、200タレア不足、ドミニカ政府が手当すると言っている処は遠く離れているので、何処か近くに移住振興会社に土地を買わせて分譲させることを考えている。となっていた。

昭和33年上塚司氏が現地を訪れた時は、土地面積不足問題以外は、何等問題になっていなかった。その土地問題さえ日本サイドで解決する方法を考えていたのである。然しその年の(昭和34年)後半あたりからドミニカ側の態度が怪しくなってきた。

その原因は、日本側は移住問題と通商問題は別と考えていたことに対し、ドミニカ側は移住者の受入れは、日本に対し高価な経済的利益を供与したものと考えていたのである。即ちドミニカと日本が締結した砂糖買付協定に延長を認めない旨を日本が表明したことにドミニカが反発したのである。その上吉岡氏が適地調査報告で懸念を書いていた、トルヒヨと事務当局の意見おの不一致もだんだん表面化してきたことに加え、ドミニカ国の財政が悪化し始めた等が重なった。その結果、昭和35年7月には、日本移民の受入れを中止せざるを得ないと通告して来たのである。昭和36年5月トルヒヨ元師が暗殺され、ドミニカ政府が行うべき水利工事、土地改良工事等も一挙に後退し始めた。従って移住地の生産条件は悪化の一途を辿り、遂に昭和36年後半から37年初頭にかけて、集団帰国となったのである。

ドミニカ移住は取敢えずはドミニカ政府と日本国公使間の交換公文で始めるが、将来は移住協定を結ぶことになっていた。そのドミニカ移住が、これで終わることになったのである。

いずれそうなると、トルヒヨの発言を信じ、全て前倒しに進めてきた実行プログラムは、一頓挫にとどまらず、移住促進側の役目を果たしていた砂糖買付協定、コロニヤ法などが弱線となって、移住者団体から突き上げられることになった。ドミニカでは、日本移民受入れの代償としての砂糖買付協定とを考えていたし、又コロニヤ法も、賃銀の支給、住宅供与その他便宜供与も、この法律を根拠とすることで、国内的には説明出来ると考えたもので、移住協定締結までの臨時措置としては充分その説明に役立てていたのだ。然しこれらが全て裏目に出た。移住者は自分達は砂糖買付協定の犠牲者であったとか、自分達は最初から自営農ではなかったのだ、とかに解釈されたのである。

然し、ドミニカ移住地の土地は、アグアネグラを除いて、一般的には土地改良工事を予定通り行えば、決して悪い土地ではない。むしろ土壌としては優良土壌なのである。

塩分土壌は良く言えば肥料養分過多地帯なのでなる。塩分イコール養分と考えればよい。人間でもそうだが養分過多では枯れてしまうのだ。

従って、灌漑と排水で調節すれば、一般の畑より

遙かに優良な作物が出来るのである。

最近、何かの間違いから原告団になっていない団体から入手した本によると、アグアネグラの私が駄目と思ったコーヒー園で立派に生計を立てている人がいることが分った。あれでも農業が成立つとすると、適地調査は全く問題ないことになる。

随分後になって、無償協力予算で水利工事を行ったり、土地補充を行ったりしたが遅過ぎたのだ。もっとスピーディに処理しておけば裁判沙汰にならなかったのではないか。(以下次号に続く)

## 関谷裕子さん！

### 青年海外協力隊入隊おめでとう！

=2009年3月ボリビア赴任予定=

早稲田大学政治経済学部の関谷さんが「ボリビアの水害罹災地に支援活動をしに行きたい。」と訪ねてこられた時の第一印象は、失礼ながら「何と、すつとんきょうな娘！」と言ったものでした。しかし話を聴いているうちに、金額的には大きな額ではないものの、自分の身の丈にあった範囲で可能なことを着実に自らの行動によって現実のものにしていきたいという真摯なものが感じとられました。

そして帰国報告に来られた関谷さんを見て「別人!」と思ったほどしっかりと、しかも美人になっているのに驚きました。「若いっていうことは、すばらしい!」『若い人の海外体験が、如何にその人を成長させるか?』の実例を見させてもらった思いです。

さっそくお願いして体験文を書いていただきました。彼女の若さ故のちょっと頭でかちな思考過程は、それはそれで、十分に楽しめますし、皆さんに若さの特権である行動力にも感じ入っていただきたいと思い、長文ですが、原文を省略せず、今号から連載をいたします。(記：渡邊)

## 見返りを求めず「見遣り」を築く

関谷裕子(青年海外協力隊員)

### はじめに

私がボリビアという国を知ったのは高校二年生のときだった。第二回商業的性的搾取に反対する世界会議が横浜で開催された、2002年のことだった。私がボリビアへ始めて行ったのは2005年。大学一年生の春休みだった。そして同じ年の夏に、もう一度ボリビアへ行った。

2008年4月末から5月、またもやボリビアへ行くことになった。今回は、国家非常事態宣言を発令したその国の、大洪水の被災者の方々に届け物をするために。2007年2月に、UNICEFのWEB



ページでその被害を知って、同年11月から始めた、ささやかな支援活動だった。

被災された方々に、心からお見舞い申し上げます。



冠水状態のトリニダの家

## 未練と決断



ベニ県トリニダ、洪水で町の中心地を除いてほぼ水没。USAID や OXFAM のロゴの入ったテントや給水ポンプが、被災した方たちを支えていた。UNICEF が提供した架設トイレも、被災地での生活に寄与していた。



救援物資を届けて子供達と

2008年5月10日、帰国した私は活動報告会を開いた。

「始めは、募金だけの予定で実際に被災地へ行くつもりは全く、ありませんでした」

と、活動を始めた時の気持ちから報告を始めた。それを聴きに来てくれたのは、大学の友人と先輩、他大学の友人の合計4名。その内2人は就職活動の真っ最中だった。

「ああ、私も本来なら、リクルートスーツに身を包んでいるべきなのに……」

と、当時大学5年生だった私は、自分に対する嫌気のような、漠然とした後悔のような、なんとも表現しがたい心苦しさを感しながらポリビアでの体験を語っていた。

そして、明日からは就職活動に専念！という気持ちは気持ちだけで、実際は、バイトに専念だった。ポリビアへ行くには、お金がかかる。週1日の希望で始めたアルバイトは、ポリビアへ行くと決まってから週5日に増やしてもらった。

ポリビアでの活動に、未練はあった。しかし、ポリビアのことを忘れて自分の将来を心配しなければならなかった。

「このままじゃ、ニートに突入だね。」

大学へ行けば、会う人みんなから、そう言われた。

自分の将来を心配しながらも毎晩、ポリビアへの未練が込み上げてきた。病気の子どもを乳母車に乗せて私のところへやって来た女性のこと。レントゲン写真を手に、体の不調を訴えてきた老人。私に同伴してくれていた医師は「肺に水が溜まっているから病院に行くべき」と診断していた。体の不調への不安を抱える人々がいた。医療サービスを受けたいのに、病院へ通うことを選択していない人々がいた。そして、医者と一緒にやって来た日本人（私）のところへ、何らかの期待をして歩み寄って来てくれた。しかし、私はそんな人々の助けになれなかった。

自分の力量不足と限界、現実認識の甘さを痛感した。絶大な未練が、心に染み渡った。

「学生の国際ボランティアは、結局、自己満足」

「学生のボランティア活動は、自らの学びのため」

「学生がどんなに頑張ったって、本質的な解決には至らない」

先輩が、教授が、友人が、そう断言していた。妥協のようなその言葉は時折、私を癒しなだめてくれた。できない自分を責めるのではなく、肯定できた。

それでも、未練は消えなかった。

自分自身の将来への不安とポリビアへの未練。この二つを同時に解消する方法として、青年海外協力隊(JOCV)に応募した。他にも何社か面接を受けたが、

「弊社で、何をやりたいですか」

という質問に、

「有給休暇を100%消化して、ポリビアに行きたい。ついでにボランティア休暇も頂きたい。」

と宣言する私を採用してくれる会社は皆無だった。



JOCV は、書類審査を通過、面接審査を2008年7月8日に受験した。

その一ヵ月後、恐る恐る、合格発表のWEB掲示板にアクセスした。山手線の中で、携帯電話の小さな画面に、自分の受験番号を探した。大学受験以来の緊張感。

「21110075、あった！」

思わず、ガッツポーズ。電車を降りて、母に電話。繋がらない。仕事か。再び電車に乗る。高田馬場で下車。大学へ向かう。大学のパソコン室で、もう一度、今度は大きな画面で、掲示板を確認した。確かに、合格していた。

その足で、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターへ向かった。JOCVを受験するに当たって、面接の練習を手伝ってくれた事務員さんにお礼を言うためだ。あいにく、欠勤日だった。手紙を書いて、置いていった。

「お蔭様で、JOCVに合格しました。まだ、どこの国で何をするのは発表されていませんが、ひとまず合格したことのみご報告申し上げます。ありがとうございました。」

たしか、こんな感じの文面だったと思う。他の応援してくれていた友人知人にも、電話やメールで同様のことを伝えた。

その次の日、JICAから正式に合格通知と赴任先の詳細が郵送されてきた。青いJICAのロゴの付いた封筒に赤で「速達」の二文字が記されていた。それを見て合格したという事実をじわじわと感じた。

歓喜溢れつつ、その封筒を開けた。まず目に飛び込んできたのは……、  
「派遣国 ポリビア」

またもや、私はポリビアへ行くことになったのだった。これはもう、運命！そして、要請内容書には「母と子の健康に焦点を当てた地域医療ネットワーク強化プログラム PROFORSA」と記されていた。これが、私に割り当てられた職務だ。医者でも看護師でも保健士でもない私に、医療に関連する仕事の機会が与えられた。もちろん治療などには携われないが、過去の未練を晴らす、絶好の仕事だと認識した。

今までは、個人的な気持ちばかりのボランティアだったけれど、これからはプロのボランティアになる。そう思うと、過去に助けられなかった人たちの顔が思い浮かんできた。これからのJOCVでの二年間は、そんな人たちのために精一杯やっつけよう。今度こそは、今まで救えなかった人たちを救おう。そんな決心をした。

## **ポリビアとの出会い**

2002年4月、高校二年生の頃。

「ポリビアから留学生が来るから、よろしくね。」

そう告げて、先生は他校へ異動となってしまった。先生は、英語の先生だったけれど、スペイン語も堪能で、クラブでスペイン語を教えていた。私も先生の教え子だった。

高校一年生の時は、コロンビアからの留学生がいた。その子は英語も堪能だった。次の年、ボリビアからの留学生を迎えることになった。しかし、その子は英語も日本語も話せなかった。それに加え、スペイン語を話す先生は異動してしまった。

私はその子と同じクラスになった。挨拶程度のスペイン語しか知らなかった私は、通じない言葉を通じ合わせようと努力する日々だった。

「オラ、エンカンターダ。ムーチョ・グスト。」  
挨拶は通じても、その後会話が続かない。会話が成り立たない。分かり合えない。共通言語がないのだから、それは当たり前だった。けれど、言葉の壁以上に、文化的背景や価値観の壁が大きな障壁だったと思う。

ボリビアと日本。

それまで、ボリビアという国の名前すら聞いたことが無かった。名前をどこかで聞いていたとしても、何も意識せずに聞き流していたと思う。そんなに遠くにあったボリビアが、いきなり、日常の中に入り込んできた。

「Me llamo Yuko」

と私が名乗ると、その子は、

「Me llamo Soledad.」

と、名前を言った。

Soledadとは、日本語に訳すと「悲しみ」という意味らしく、とても違和感のある名前だった。

「私、悲しいわ」

と言って、涙を見せれば、たくさんの方が助けてくれて寂しい思いをしない、という願いを込めた名前なのだろう。

この子と一緒に、クラスメートとして約一年間を過ごした。

そしてその同じ一年間、私は「ユニセフ子どもネット」というUNICEFが管轄する会のメンバーだった。第二回商業的性的搾取に反対する世界会議に向けてのセミナー合宿や勉強会に参加した。児童労働や子どもの権利について、勉強した。

ユニセフの資料の中に、5歳未満の死亡率を表した地図があった。死亡率の高い国ほど、濃い色で示されていた。日本は白っぽかった。それに対してボリビアは、中南米の中で一番濃い色で塗られていた。中南米の最貧国、ボリビア。

こうして、2002年、高校二年生だった私は「ボリビア」という国を知ったのだった。クラスメートの出身地としてのボリビアと中南米の最貧国としてのボリビアを。

## **国際ボランティアへの開眼**

ユニセフのセミナーは、とても刺激的で有意義だった。まずは「プンとミーチャの物語」という絵本を使ったワークショップで始まった。

物語の舞台は東南アジアのある地域。田舎で暮らしていた少女が、テレビと交換に都会へ売られていく。売られた先では、性産業の仕事を強いられる。客には、日本人もいる。やがて、少女はエイズに感染、そして他界する。

実話を描いたこの絵本を、役を振り分けて回し読みをした。

私は、買いに来る男の役をやった。他に、売られる少女の役、少女の親の役などがあった。

物語の輪読が終わると、リーダー各の男子が言った、

「これを読むと、かわいそうだって思うよね」

「これって、実話なんだよね」

「僕たちにできることを、何か始めたいね。」

そして5～6人のグループに分かれて、感想を言い合った。日本の子どもにできることはなんなのかブレイン・ストーミングに突入した。小学生から高校生が、一つの輪になって話し合った。

子どもたちのみでの話し合いの後に、VTRを観た。ユニセフ親善大使としてアグネスチャンさんがタイの日本人街を視察したドキュメンタリーだった。最年少5歳の女性が、夜の街で客を待っていた。

セクシャルワーク以外の児童労働についてもユニセフの職員さんから話があった。少年兵や工場での労働の話だった。

とにかく、ショックだった。可哀想というだけでもない、同情とは違う感情もあったように思う。突き詰めてその感情を分析すれば、罪悪感と義務感だった。

決して、よその国の貧しい人だけの問題ではない、日本とも関係している事実。ただ日本人が「普通」の生活をしているだけで、知らず知らずにも、子どもを搾取して生産された衣類などを消費しているという事実。加害者の一員であるという実感。

その現実には納得いかないからこそ、なんとかしなくてはならない。「やりたい」でもなく「やってあげたい」でもなく、「やるべき」という思い。惨忍な現実を変えていくために、やるべきことをやっていかなくてはいけないという感情。

2002年5月のユニセフ・ハウスで、私の心は熱くなった。

## 貧しいボリビア、豊かなボリビア

ユニセフのセミナーの影響で、学校でも児童労働を話題にするようになった。もちろんそれは、その学校では私だけ。たいていの友人や先輩、後輩は、暗い話になるからか、興味を示さなかった。ボリビアから来ていた Soledad も、ボリビアの児童労働について質問する私を拒んだ。

学園祭の催しで、私が所属していた海外研究部では児童労働について展示などを行なった。唯一、理解を示してくれたジョアンナ先生の後ろ盾で、私の意見が通ったからだった。しかし、生徒諸君は全く

乗り気ではなかった。

文化祭当日、「ブンとミーチャの物語」のアニメバージョンの上映を予定していた。ユニセフ協会から取り寄せたビデオを、再生しようとしたその時、部長だった先輩は、

「雰囲気暗いから、それじゃなくてミスタービーンにしてよ」

と言って、先輩自前の「Mr.ビーン」を再生し始めた。

更なる大打撃として、その場を通りかかった社会科教諭が、

「内容が、真面目だから人が寄り付かない」

と言い放って嘲笑した。

この現実には、ユニセフ・ハウスでのショック同様にショックだった。

ナイチンゲールは「愛情の反対は、憎しみではなく無関心」と言った。その無関心を、その時私は痛感した。よその国の貧しい子どもの労働状況への無関心は、その子ども達が生産したものを消費している人々ですら関心を持たない。無視される「つながり」がそこにはある。

学園祭のその現場に、Soledad もいた。私が Soledad に始めて児童労働の話をした時が思い出された。

「アフリカには、たくさん貧乏な人がいるんだよね！」

と明るく言っていた Soledad。その笑顔から、アフリカの事実を知ろうともしない、一方的な偏見と差別のようなものを感じた。そして反射的に私は、

「ボリビアもでしょ？」

と、貧困マップを見せながら言った。一気に、Soledad の顔色が変わった。困惑と悲愴を垣間見せるその顔。

それから Soledad は貧しさを否定するかのようになり、ボリビアの高層ビルや観光名所をアピールするようになった。母国を貧しいと言われ、癪に障ったのだろうか。愛国心やプライドが、そうさせたのだろうか。私の態度が、ボリビアへの一方的な偏見や差別のように映ったのだろうか。

そんな私に Soledad が伝えたかったのは、きっと、フォルクローレやティワナク遺跡、チチカカ湖、ウユニの塩湖とサボテン……、ボリビアの、「豊か」な姿だったのだろう。

「ボリビア = 途上国 = 貧困」と一面的に決め付けていた私に、Soledad はボリビアの魅力をアピールしていた。

Soledad のアフリカへのまなざしと同様のまなざしを、私はボリビアに向けてしまっていた。そんな私のまなざしは、その5年後、二度のボリビア渡航を経て、大学でパウロ・フレイレやフランツ・ファノンを読み、少しずつ改善に至っていった。

もちろん、ボリビアに貧困がない、ということではない。

## 学生の国際ボランティア

大学生になった年の4月。「タガログ語」の授業のメンバーが刺激的だった。

その内の最も激だった先輩は、一年に5～6回はフィリピンへ行く人だった。科目選択よりもバイトのシフトを優先し、渡航費を稼いで、連休があればフィリピンへ、という生活をしていたそうだ。当時4年生だったその先輩は、平和学や開発学を専攻していた。フィリピンでは、孤児を保護し教育する活動に励んでいると言って、写真を見せてくれた。

私は、その先輩のような生活を希望してひとまず大学生になったものの、やりたいことをやっていなかった。新生活に順応できない日々、やりたいことをやれていない現実。こんな大学生活でいいのかと、不満と不安を抱いていた。

そんな私に、その先輩がくれたアドバイスは、「とにかく現場へ。まずは、現場へ。」

ワークキャンプに参加してみてもどうかと勧めてくれた。

「ワークキャンプ」をGOOGLEで検索すると、いくつものNGOが引っかかった。フィリピンやカンボジア、インドなどへのワークキャンプやスタディツアーの情報がでてきた。けれど私は、そのどれにも行かなかった。

「大学生になってから始めていく外国は、ボリビア」

と、なんとなくだけれど決めていたからだ。Soledadに会いに行く。中南米の最貧国を、自分の目で見る。現実を肌で感じる。ぼんやりと、そんな決意をしていた。

ボリビアで活動しているNGOを見つけることができなかった。たとえあったとしても、既成の出来上がったボランティア的ツアーに行くことにささやかな抵抗感があった。自分の目で、現実をしっかりと見て感じるには、誰かが作ったものに乗っかるのでは、準備されていたものしか見えないと思っていた。

だから私は、ワークキャンプでもなく、スタディツアーでもなく、個人でボリビアへ行くことにした。観光旅行ではないという意識で行く、個人の旅としてボリビアへ。

## ボリビアへの道のり

ひとまず、渡航費の捻出がボリビアへの第一歩だった。スーパーや塾講師、派遣のバイトで、資金を作り始めた。

スーパーのバイトの履歴書に、

「志望動機：ボリビア共和国へ行く資金を稼ぐため……」

と書いた。面接で、それを読んだ店長が

「ボリビア共和国？どんぐり共和国なら聞いたことがありますよ。」

と反応していた。どんぐり共和国は、ジブリの…

…。

現代の日本で、ジブ리를知らない人はほとんどいないかもしれない。「となりのトトロ」「もののけ姫」「千と千尋」「ハウルの動く城」「崖の上のポニョ」……。どれも名作。

それに対して、ボリビアを知っている人は？

「どこ、それ？アフリカ？」

と言われてしまう南アメリカの中央に位置する内陸国がボリビア。そこに、私は行こうとしていた。ボリビアを、とても遠いと感じる日々だった。

大学一年目の夏休みは、毎日、そのスーパーで働いていた。自給は850円で、朝の二時間は早朝手当ての200円が加算された。10月になり、大学に通わなくてはならなくなってからは、土日祝日に派遣の日雇いバイトで働いた。平日の夕方から夜に学習塾で働いたりもした。

その年の年末には、20万円くらい貯まった。

「これで、航空券が買える！」

「春休みにはボリビアへ行く！」

インターネットで「ボリビア 格安航空券」を検索した。いくつか引っかかったが、SKY-GATEというWEBサイトが最安値だった。19万円で航空券を買った。

チケットが入手できたら、次にやることは安全対策だった。外務省の危険情報のページにアクセスした。

「ボリビア 首絞め強盗」

「ボリビア 危険度4 渡航の際には十分に注意」そんな情報を目にした。

「行ってしまっても大丈夫かなあ……」

不安で胸がいっぱいになった。

ボリビアにいる、Soledadにメールを打った。予想外の返事が来た。

「ボリビアの経済はとても悪い。姉が仕事を探している。日本に行きたい。日本に仕事はありますか？」

もちろん、「私に対して是非ボリビアへ来てください」とも書かれていたが、そのメールの趣旨は出稼ぎの相談だった。

日系人ではないSoledadの一家は、合法的に日本で働くことは難しい。法務省は、不法就労外国人を摘発するキャンペーンを公布していた。日焼けした小学生の日本人の小学生が東南アジアからの不法入国者に間違われ事情聴取を受けたという事件まであった。それが日本であり日本は、よその国の人が気軽に働ける場所では決してない。

Soledadからのメールに私は、

「日本に来て仕事はないし、牢屋よりひどい牢屋のようなところ（入国管理局）に閉じ込められるだけだよ」

と返信した。想定される危険を正直に伝えることが、最高の思いやりだと思った。私がボリビアに対して抱いていた危険については、「だいじょうぶ、心配ない」とSoledadは言った。それでも私は心配だ

ったけれど。

治安はもとより、疫病も心配だった。黄熱病の予防接種を受けることにした。インターネットで保健所を検索、電話番号をメモしてすぐに予約を入れた。摂取してから免疫ができるまで10日程かかるため、出国の10日前には摂取したかった。生ワクチンなため、それなりの発熱も想定されていたので、大学の試験期間を避けたかった。そうすると、一月上旬に受けるしかない。摂取可能な曜日が決まっていた。善は急げ、注射も急げ。急いで予約、急いで摂取した。この免疫は10年間有効で、今でもそれは効いている。

2月になった。出国の日が来た。American Airlinesで19時の成田発、シカゴ行きに搭乗。シカゴは雪が降っていた。そのシカゴから、半袖ハーパンでオツケーなマイアミへ。マイアミに着いたのは現地時間で22時。23時50分発のボリビア行きに乗り継いだ。日本の二月の服装だった私は、暑い、そして眠い。

マイアミの空港で、日本の家族に電話をかけた。初めて手にするアメリカの公衆電話。使い方が、不明。近くにいる人を良く見渡し、アメリカ人らしい人に声をかけた。

「電話の使い方、教えてもらえますか？」

すると、あまり親切ではなかったけれど、カードを買わなければ繋がらないこと、詳細はカードに記載されているということを知ってくれた。今や携帯電話に権力を握られて点在している、日本のテレホンカードと公衆電話が恋しくなった。

こんなところで苦戦していてボリビアで大丈夫かと心配になったけれど、無事に電話は繋がった。父が電話に出た。

「今、マイアミにいる。あと8時間後には確実にボリビアに到着しているはずだ」

と告げると、

「まだ、到着してないのか！」

と、心配ではなく単なる驚きの言葉を発した。ちなみに私の父は、時速50キロの道路ですら時速30キロくらいのアンダンテなスピードで走行する。どこに行くにも、ゆっくりで、「まだ着かないの！！」はいつも私のセリフだった。一人で外国に行けるほど大人になった私は、ついに父と立場逆転、下克上を果たしたのだ。私が飛行機を操縦しているわけではないけれど。

もはや子どもではない、と思うと胸の中にあった不安が消えていくような気がした。

不安といえば、人は神頼みをする傾向にある。私の母がその典型だ。出国の直前に、母は私にあることを勧めた。方位除けの御祈祷である。

「どこの神社がいいかしら？」

栃木県在住の母にとって、佐野の厄除けが第一候補だったらしいが、我が家から最寄りの乃木神社に行くことになった。

しかし、「親の心、子知らず」そして、子の心、親

は知らず。

御祈祷を受けて、これで一安心と思っただが、甘かった。呪術が好きな母はパスポートを入れたハンドバックに、お経やお数珠を入れたのだ。しかも、私の知らぬ間に。空港でパスポートを取り出すたびに、この仏教アイテムが目についた。神様にも仏様にも申し訳ないが、邪魔以外の何者でもなかった。

ここ、マイアミの空港でも同様に。

ボリビア行きの飛行機に乗り込む。チケットを取り出すためにバックを開ける。パスポートのケースに挟んでいたチケット。それに対抗するかのよう存在するお経とお数珠。キリスト教が主流の国に連れて行かれる仏教グッズ。きっと、こいつらに出番はないであろう。そう思うとお釈迦様や仏様が可哀想になってしまった。

そもそも宗教とはなんなのか、神様とはなんなのか、そんなことを思考しながら、ボリビアへのフライトが始まった。

私は飛行機の中では、こまめに水分を補給するように心がけている。エコノミークラス症候群の予防のためだ。CAさんがやって来るとまずは必ず

「お茶、水」

を二杯ずつお願いする。たいていの場合は、りんごジュースとオレンジジュースもお願いする。アメリカの国内線では緑茶が用意されていない。当然なのだが、虫歯予防のための緑茶がないのは困り者だ。糖分を含むジュース類を控えなくてはならないからだ。つまり、りんごやオレンジからビタミンを補給できなくなるのだ。機内では、なかなか歯磨きの時間を作れないから、仕方ない。ただし、グレープフルーツジュースは例外で、血液をサラサラにする作用のあるグレープフルーツは、長いフライトで血栓ができてしまうのを予防するには絶品なのだ。虫歯になることと血管が詰まること、どちらを優先して予防するかといえば、後者である。虫歯になってもグレープフルーツジュースは飲む。

この時も、いつもと同じようにCAさんに

「え？これ一人で飲むの？」

と思われるほどの飲み物を頼んだ。水を3杯、紅茶を1杯。その後、約三十分ごとに水を頼んだ。

嫌な顔一つせずにサービスするCAさんは、肌の黒い男性だった。アメリカの人なのかなあ、と見ていたら、

「あなた、どこの国の人なの？」

と、私に尋ねてきた。お互い同じような疑問を抱いていたらしい。そういえば、シカゴへ行く便では日本語も話せるCAさんに英語で応対されていた私。シカゴの空港内のショップで、タイ人だと間違われた私。この時も、スペイン語で話しかけるが外見がアジア系のような、南米の日系人のような、それにしてもスペイン語が片言の不思議な存在の私だったのである。

本当は日本人だけれど、こんな公共の場で正直に言ったら誘拐でもされてしまうかもしれない……、

大げさにもそんな懸念が沸き起こった。しかし、何  
度もお水を汲んでいただいている身で、しかとする  
わけにはいかない。妥協策として、

「ハボン（日本）」

と、マジカル・リップで応えた。

マジカル・リップとは、かつて坂東英二が司会を  
勤めていたクイズ番組のコンテンツの一つ。声を出  
さず、口の動きだけで行なう伝言ゲームだ。

乗客諸君に聞こえないように、その CA さんだけ  
に伝わるように、私はマジカル・リップを使ったの  
だった。しかし CA さんに伝わったのは文字面だけ  
だった。私の唇の動きを読み取った CA さんは、

「ああ、ハボン（日本）！」

と、声に出してしまったのだ。

「CA さん、ご名答ですよ」

と心の内でつぶやいて、CA さんに、水を頼んだ。

そうこうしていたら、あっという間にボリビアに  
近づいていた。アナウンスに従い、シートベルトを  
締めた。ここまで来ると、日本語を耳にすることが  
ない。アナウンスは英語とスペイン語のみ。日本人  
らしき人もほとんど見当たらない。

ついに来てしまった、という感情と、やっとここ  
まで来た、という感情。

飛行機は下降、着陸まで、あと数分。

ジャジャジャジャジャー！

と、止まった……。着陸した。到着した。

シートベルトを外して、立ち上がる。荷物を持っ  
て前に進む。

おやっ？高齡の女性が、細い透明の管に繋がれて  
いた。パイロットさんまでもが、酸素マスクを着け  
ていた。

とんでもないところに来てしまったと悟った。

そして、前もって用意していたアレをポケットか  
ら取り出した。アレとは、駅伝の選手が鼻に付けて  
いるアレである。

あまり西洋医学が好きではない私は、高山病にな  
ってもバファリンを飲むことに抵抗があった。他の  
薬も勘弁だった。酸素が薄いから高山病になるの  
であるから、酸素の取り込み量を増やせばよい。そう  
考えると必要なのは、薬ではなかった。箱根駅伝に  
ヒントをもらって、用意したのは、鼻腔を広げるシ  
ールだった。

私はコレを3つつ、鼻の付け根に重ね付けにした。  
鼻の付け根にカットバンを3枚付けている人間の顔  
を想像していただきたい。私は、そんな外見でボリ  
ビアの通関に臨んだのだ。

入国カードを記入しようとした時、

「やられた……」

マイアミまではあったはずのボールペンが、ない。  
すられていた。きっと、あの CA さんの飛行機の中  
で。マジカル・リップをしたころに。そう言えば、  
あの時、体当たりしてきた子供がいたんだ。あの子  
にやられたのかな。とはいえ、ここで誰に容疑をか  
けようとも無くなったボールペンは戻ってこない。

仕方がないので、近くにいた人にペンを貸してもら  
った。

そして難なく、ボリビアへの入国を果たした。こ  
こは、ラパス。エルアルト空港。標高4000メー  
トル、空気が薄い。

空港を出ると、Soledad が迎えに来てくれていた。  
Soledad の隣には Soledad のお父さん、お母さん、  
タクシーの運転手さんがいた。さらに、私を歓迎す  
る花束。

感激だった。

空港を出ると、タクシーの客引きに声をかけられ  
た。キャンディーを売りに来る少年もいた。何も分  
らないまま、Soledad とその両親に囲まれて、用意  
してくれていたタクシーに乗った。

朝日が、きれいだった。そして、そこは山だった。  
坂だらけだった。空港から、どんどん坂を下って行  
った。

途中、伝統的な衣服の女性が目に入った。頭にチ  
ョコンと黒いハットをのせて、ボリュームのある白  
っぽいスカートと肩には茶色い厚手のショールを羽  
織った小柄のおばあさん。そういう民族色を漂わせ  
た装いの人々が、普通に日常的に存在している。そ  
の光景が新鮮だった。

(以下次号につづく)

## 編集後記

カントウータ 13 が完成しました。今号はいままで  
の号にも増して内容のある読み応えのある立派な号  
になりました。白川光徳さん、柏木舞子さん、白石  
健次さん、関谷裕子さんそれぞれ価値のある奥の深  
い文章で、ボリビアでご体験なさった方だけに書け  
る立派な内容です。希望を胸に船出した移住者の皆  
様が移住地を今日の姿に発展させて下さったご努力、  
ご苦労の数々思わず涙が出てまいります。二度移住  
地を訪ねさせて頂いた私が、直接お話しをうけたま  
わった一人一人の顔が思い出されました。貴重な  
文を頂戴できましたことを深く心から御礼申し上げ  
ると共に尊いご体験をお持ちの方の紙面参加をお待  
ちしております。(杉田)

(編集委員)

杉田房子委員長、大貫良夫、細野 豊

(広報委員)

渡邊英樹、長嶺為泰、金木克公



## 平成 19 会計年度総会議事録

平成 20 年 8 月 25 日午後 4 時 00 分より、当協会のある第一西脇ビル 1 階会議室において平成 19 会計年度の総会が、開催された。

会員総数（会費納入または出欠席の連絡あった人の総数） 49  
出席者数 10  
委任状 33  
有効議決権数 43

よって、本総会は、会員総数の過半数に達し、適法に成立した。

出席者は次のとおりである。  
山下徳夫、林屋永吉、杉田房子、渡邊英樹、小川秀樹、白石健次、今村忠雄、佐々木仁、細野豊、西脇商事(有)

議長林屋永吉が開会を宣言し、議事録署名人に今村忠雄、細野豊を選任して、議事に入った。

### ・第 1 号議案 平成 19 年度事業報告及び収支決算並びに財産目録承認の件

議長林屋永吉は、別添のとおり的事業報告と収支決算ならびに財産目録に関する詳細説明を渡邊専務理事に行わしめ、続いて佐々木仁監事の監査報告を求め後に、その当否について諮ったところ、満場一致をもってこれを、承認・可決した。

### ・第 2 号議案 平成 20 年度業計画及び収支予算承認の件

議長は、別添のとおり平成 20 年度の事業計画及び収支予算に関する詳細説明を渡邊専務理事に行わした後に、その当否について諮ったところ、満場一致をもってこれを、承認・可決した。

### ・第 3 号議案 一般社団法人施行後の法人組織について

議長は、本年 12 月 1 日施行予定の一般社団法人法施行後の法人組織について、一般社団法人として存続するか又は 5 年以内の認可を受けずに解散するかを一同に諮ったところ、当団体は、現状では、国からの補助金等の支給を一切受けずに、会員の会費によって運営しており、将来的にも法人格を取得せず、任意団体として継続して活動を行いたい旨の意見が出て、一同の意見を求めたところ満場一致をもって賛同した。

### ・第 4 号議案 役員を選出

議長は、理事および監事が定款の規定により、任期満了いるので、その選任の必要がある旨を述べ、その選任方法を諮ったところ出会員中から、議長の指名に一任したいとの発言があり、一同これを承認したので、議長は下記の者をそれぞれ指名し、これらの者につきその可否を議場に諮ったところ、満場一致をもってこれを承認可決した。

#### 理事の選出

- ・理事 林屋永吉
- ・理事 杉田房子
- ・理事 大貫良夫
- ・理事 渡邊英樹
- ・理事 長崎 弘
- ・理事 小川秀樹
- ・理事 国本伊代
- ・理事 細野 豊
- ・理事 今村忠雄
- ・理事 嘉手苅義男
- ・理事 長嶺為泰
- ・理事 白石健次
- ・理事 白川光徳

#### 監事の選出

- ・監事 佐々木仁
- ・監事 金木克公

#### 名誉役員

- ・名誉会長 山下徳夫
- ・相談役 田中 茂

議長は、以上をもって本日の議事を終了した旨を述べ、午後 5 時 00 分閉会を宣言した。

以上の決議を明確にするため、この議事録を作成し、議長並びに議事録署名人がこれに記名押印する。

平成 20 年 8 月 25 日

社団法人 日本ポリビア協会総会

議長 理事 林屋永吉 印  
理事(議事録署名人) 今村忠雄 印  
理事(議事録署名人) 細野 豊 印

出竹杯ゴルフ会・356 会・宮良多鶴子後援会・ポリビアンチャリティクラブ  
の皆さまへ

ご支援を頂きましたポリビア国の「サン・マルティンの家」の主宰者野原昭子  
さんより近況報告がありました。良い方向に向かっておりますのも皆様のご協力  
のお陰と心より御礼申し上げます。

社団法人日本ポリビア協会

《復信 2008.12.19 受信》

WATANABE 様

返事が本当に遅くなって申し訳ありません。

言い訳ですが、メールなどというもの私のように時代遅れの生活をしているものには本当に大変  
なことでメールを開けるのさえ 1 週間に 1 回開ければいいほうです。

そういう訳でこんなに遅くなりました。まだ会議に間に合うのでしょうか？

つい最近大使館から施設建築プロジェクト援助申請の受け入れ決定の嬉しい連絡をうけ、1 8  
日、パスの大使館での署名式に行ってきました。

この決定を受け来年の 2 月中旬より 4 5 日ほどの予定で日本帰国を予定しました。

理由は、ドルがどんどん下がるのにこちらの物価は反比例してどんどん上がっています。

それで予定額で無事工事が終わられるか怪しい状態です。また私達は 2 階建ての設計を提出し  
たのですが 1 階の部分だけしか受け入れられませんでした。それでもし日本でもう少しお金が集  
められればとの欲も出して思い切ってもう一度帰る事にしました。

よろしければその意向で何か計画していただければほんとうにうれしいのですが。

もちろん報告すべき嬉しいニュースがたくさんあります。

話は変わりますが、今日 1 9 日無事 2 0 0 8 年の全ての活動をクリスマス会を持って終了しまし  
た。

1 月 1 2 日から 2 0 0 9 年のリハビリが開始されます。

皆様方の上に神様の恵みを願い 2 0 0 9 年がそれぞれに素晴らしい年となりますように祈り、ま  
たお会いできます事を楽しみにして

野原昭子

《往信》

2008/11/17 2:35

野原昭子様

俵 康子様

冠省 お変わりありませんか？またクリスマスが近づいてまいりました。

ポリビアンチャリティクラブの方でまたご協力申し上げることを検討中です。

つきましては、近況をご報告いただけると会議に掛けやすいのでありがたいです。

よろしく願いいたします。

また、ソプラノ歌手の宮良多鶴子さんが、リコーダーを集めたり、文房具メーカーから  
若干傷等がある文房具をいただくように動いたりされています。

もし、文房具をおくるとなると、そちらでは新品と看做されかねません。もちろんこちらで  
安次嶺大使にも相談いたしますが、そちらでのご懸念等をご回示いただけたら幸いです。 草々

Hideki Watanabe

Gerente general de

Asociacion Nippon-Bolivia